

45

嚴智鍾の台湾血清ワクチン製造所の
主要期間の予備調査

誌上発表

容 世明

長庚病院

嚴智鍾 (Ludwig Chih-Chung Yen 1889–1974) は、台湾血清ワクチン製造所の所長 (1951年9月から1963年6月) および国立台湾大学医学部の教授兼細菌学学科主任 (1947年1月から1969年7月) を務めました。この研究は、嚴智鍾の台湾血清ワクチン製造所に対する、日本での経験の影響についてです。

嚴智鍾は、清国天津の生まれです。父は嚴修といい、嚴智鍾は10歳で張伯苓から英語と数学を学びました。13歳で日本に留学し、東京高等師範学校附属中学校 (明治40)、第一高等学校 (明治44) を経て、1915年 (大正4年) 7月東京帝国大学医科大学を卒業、傳染病研究所にて細菌学研究をしました。1917年 (大正6年) 4月に北京傳染病院院長に任ぜられ、同年9月には北京医学専門学校教授も兼任しました。1919年から1923年まで中央防疫所の技術所長を務めました。1928年に衛生部医政司長、1932年10月に軍医学校学長となります。1947年8月に国立台湾大学医学部長・同医学部細菌学学科主任となります。1951年から1963年まで台湾血清ワクチン製造所長を務めました。1965年8月に国立台湾大学医学部微生物学研究所長、1968年8月に中華民國微生物学会会長、1973年1月に退官しました。

台湾血清ワクチン製造所の前身は国立台湾大学熱帯医学研究所の一部であり、国立台湾大学熱帯医学研究所の前身は台北帝国大学熱帯医学研究所です。医学研究所の時代の士林支部は、主に台湾全体の流行予防のための血清ワクチンの製造に取り組んでいました。国立台湾大学熱帯医学研究所が解散し、公衆衛生研究所と台湾血清ワクチン製造所に再編成されたのはなぜでしょうか。これは主に、北京協和医学院の元教授であるジョンB. グラント (John B. Grant) が台湾大学学長傅斯年に行った調査と勧告によるものです。嚴智鍾はかつて中央防疫所の最初の技術所長を務め、グラントも中央防疫部に検査報告書を提出しました。2人は北京でお互いを知っていました。嚴智鍾は、台湾血清ワクチン製造所の所長に就任しました。嚴智鍾は、東京帝国大学医学部および東京帝国大学傳染病研究所の学術経験があり、日本の植民地時代とある程度の継続性があるようです。

台湾中央研究院のメンバーである魏火曜は、嚴智鍾が台湾血清ワクチン製造所のディレクターであるとコメントし「この12年間で、嚴氏はすべての困難を克服し、仕事を修正し、専門家を採用し、製造技術のレベルと製品の質と量を改善しました。嚴氏にとって、これは台湾で最も困難な時期です。高尚な人格と管理経験がそれを可能にしました。」とした。

第一高等学校の新渡戸稲造校長は、嚴智鍾に深い感銘を与えました。新渡戸校長について次のように言っています。「説明では、いつでもどこでも世界で観察する方法と行動する方法を目に見えない形で案内することができます……これらの哲学的な人生のインスピレーションは私の人生に大きなプラスの影響を与えました。」

1951年、劉瑞恒と嚴智鍾は2週間日本医学を勉強するために日本に行きました。台湾血清ワクチン製造所は、1953年夏に初めてインフルエンザウイルス株の分離に成功し、代表的な株を日本のインフルエンザ研究センターに送って比較しました。王三聘 (San-ping Wang) は彰化出身で、慶應義塾大学医学部を卒業後、細菌学教室の助手として在籍し、1947年に台湾に戻り、1952年の台湾血清ワクチン製造所の細菌組の主任を務めました。王三聘は戦前に北里柴三郎の影響を受け、日本の細菌学の系譜を持っています。嚴智鍾は戦前に傳染病研究所の影響を受け、日本の細菌学の系譜を持っています。

この研究では、台湾の血清ワクチン製造所と日本の細菌学の知識の系譜と学術脈絡を分析しました。

(本発表は Ministry of Science and Technology 科研費 MOST 110-2410-H-182A-001- の助成を受けたものです。)